

TEACCHプログラム

TEACCH（ティーチ）とは、Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped Children の下線部を綴った略語で、「自閉症とその関連する領域にあるコミュニケーション障害の子どもたちの治療と教育」と日本語では直訳されます。

米国ノースカロライナ大学のエリック・ショプラー博士を中心に、同大学のTEACCH部が開発し、発展させてきたもので、世界中で最も進んだ自閉症の人たちへの社会援助システムです。現在では世界の多くの国々が導入、実践しています。

ノースカロライナ州では、自閉症の人たちが、診断を受けた直後の幼児の頃から学校時代、そして成人したあとまでそれぞれのライフステージに応じた援助を受けています。

プレスクール、小学校、中学校、高校の各学校には自閉症の子どものために設けられた特別クラスにTEACCH部のコンサルテーションが行き届き、全州で共通の一貫した自閉症教育を可能にしています。また、「共同治療者」としての両親に対する援助システムも、TEACCHプログラムの大きな柱の1つとして位置付けられています。そして、青年期以降も居住や就労などのさまざまなプログラムを用意し、自閉症の人たちの生涯にわたる社会生活を支援しています。

はじめに

自閉症は脳に何らかの障害があるために、社会生活を送る上でさまざまな困難を伴い、生涯にわたる援助を必要とする障害です。この自閉症の人たちへの教育と福祉の包括的な援助システムとして、世界で最も優れた成果をあげているのが米国ノースカロライナ州のTEACCHプログラムです。

1989年2月、私たちはTEACCH部の現地スタッフによる5日間のトレーニングセミナーを、日本で初めて東京と大阪の2カ所で開催しました。TEACCHプログラムの実際的なエッセンスが、日本で初めて実践を伴って紹介された時でした。この時を「日本の自閉症療育における黒船」と表現する臨床の専門家も少なくありません。確かに、このセミナーを機に日本でのTEACCHに対する現場レベルでの理解は飛躍的に広がりました。自閉症の障害理解についても、例えば「彼らは視覚的な情報の理解が得意である」といった、現在では常識となっていることなどを含めて、ずいぶん浸透しました。

この「黒船」以来、各地でTEACCHプログラムを参考にしたセミナーや勉強会が開かれました。そのうちの1つに日本自閉症協会による『施設職員・教師のための自閉症短期集中セミナー』があります。1999年8月、このセミナーが10周年を迎えるのを記念して、同協会はTEACCH部のスタッフを招き、『教師のための自閉症集中トレーニングセミナー』を東京と京都の2カ所で開催しました。そして同時に、これに合わせて来日したノースカロライナ大学のTEACCH部部長で、世界的な活躍を続けるゲーリー・メジボフ教授による講演会も、全国各地で開催したのです。

メジボフ教授による講演会は、東京（代々木）を皮切りに、札幌、仙台、東京（有楽町）、名古屋、大阪、京都の7会場に及び、それぞれの会場で異なるテーマが設定されました。聴講者は述べ3,000人余り、TEACCHプログラムの概要から実際のプログラムやサービス

の内容、自閉症の障害理解についての現在の世界的な流れなど、自閉症の人たちを支援するための多岐にわたる内容のレクチャーを受けることができました。

この各地の講演会の内容を採録したものを大幅に構成し直し、加筆、修正したものがこのガイドブック『自閉症の人たちを支援するということ—TEACCHプログラム新世紀へ』です。

残念ながらTEACCHプログラムは、独自の指導方法の一部のみが独り歩きしてしまったり、あるいは間違っって伝わってしまったり、またプログラムという語感から受ける印象などによって、日本で紹介された当初から現在まで、さまざまな誤解がついて回りました。メジボフ教授は、その誤解の多くが「TEACCHプログラムを理解していない、あるいは理解しようとしないうことからくるものだ」と語っています。

一方で、ここ近年TEACCHプログラムの考え方を導入、実践する日本の親や教師、施設職員、臨床家は着実に増え、何よりもその目覚ましい成果が見えることによって、さらにTEACCHプログラムを実践しようとする人たちの輪が広がっていることも確かです。

本書は、プログラムやシステムの概要、具体的な方策についての考え方や方法論など、TEACCHプログラムの全容を解説したものです。そしてこれまでに出版されている翻訳ものも含まれた関連書物の中で、どれよりもよりTEACCHプログラムのすべてを網羅した解説書となりました。本書はTEACCHプログラムの全貌を、その総責任者自らが語った記念すべき出版物と言えます。

それと同時に、本書はTEACCHプログラムの重要なメッセージ、哲学の書でもあります。そのメッセージとは、TEACCHプログラムの人々が常に訴えてきた「自閉症の障害を正しく理解する」ことです。彼らは、いまもって自閉症を理解するための努力を惜しむ

ことや怠ることをしていません。本書の長いタイトル『自閉症の人たちを支援するということ』には、メジボフ教授、すなわちTEACCHプログラムのこのメッセージも含めたつもりです。

本文について、佐々木正美さん、内山登紀夫さん、村松陽子さんに監修していただき、文中の難解または重要と思われる語について脚注を入れ、さらに各章末で解説をしていただき、より一層理解を深められるようにしました。広がりつつあるTEACCHプログラムの実践の輪の中で、このガイドブックが自閉症の人たちを支援するために第2の「黒船」となることを願います。

本書の基となるすばらしい講演会を各地で開催し、その講演録をご提供くださった日本自閉症協会に敬意を表しますとともに、紙面を借りてお礼申しあげます。

そして、自国のみならず世界中に暮らす自閉症の人たちのために努力を惜しまれないゲーリー・メジボフ教授。貴重な講演を残していただいた上に、本書の編集、出版に対して快くご了解をくださいました。心から感謝をいたします。

2001年3月

朝日新聞厚生文化事業団

目 次

第1章 『TEACCHプログラム概説』	9
「TEACCHの三大要素」	9
《さまざまな協力と共同》	9
《包括的サービスの提供》	11
《構造化された指導法》	12
「自閉症の文化：4つの側面」	15
《視覚に強い》	15
《細部に焦点を当ててこだわる》	15
《時間や空間の組織化が難しい》	17
《感覚刺激への対応が困難》	19
「個別の評価」	19
用語解説	22
第2章 『TEACCHの生活支援システム』	25
「TEACCHのサポートシステム」	25
《協力と共同・再説》	25
《自閉症の障害の理解》	28
《直接・間接の支援》	30
「TEACCHのサービスプログラム」	31
《TEACCHセンターの役割》	31
《家族の4つのニーズ》	32
《家族へのプログラム》	34
《兄弟へのケア》	34
《親同士の相互サポート》	34
《レスパイトケア》	34
《成人へのサービス》	35
《居住プログラム》	35
《職業プログラム》	36
用語解説	38

第3章 『TEACCHの教育プログラム』	41
「物理的構造化」	41
「スケジュール」	43
「ワークシステム」	45
「視覚的構造化」	51
「個別活動の重要性」	53
「余暇活動の重要性」	54
第4章 『TEACCHプログラムの発展と成果』	55
第5章 『TEACCH-21世紀の挑戦』	61
「増加するニーズ」	61
「自閉症の発生率」	63
「自閉症のパターンの変化」	64
「解明すべき課題」	66
「21世紀の挑戦」	68
用語解説	70
ひと	72
監修者あとがき	74

TEACCHプログラム概説

「TEACCHの三大要素」

TEACCHプログラムは、アメリカのノースカロライナ州で自閉症の人たちのためのプログラムとして1963年に開始されました。このプログラムは自閉症の人たちの誕生から亡くなるまで、すべての年齢の人々を含み、非常に重篤な人から機能レベルの高い人まで、さまざまなレベルの人に対して、その生活のすべてにわたってサービスを提供するものです。

ノースカロライナ州はワシントンDCから南に250マイル、デイズニーランドで有名なフロリダから北に500マイルの位置にあります。アメリカ50州の中で12番目に大きな州で、人口は約650万人、アメリカの中では比較的大きな州ですけれども、人口が密集している大きな都市はなく、シャーロットという最も大きな街でさえも人口は約60万人です。州の面積は日本の3分の1ととても広く、州内のいろいろなところに住民が分散して住んでいます。

TEACCHプログラムはこの州を9つの地域に分けて9カ所のセンターを設けています。アッシュビル、フェイエットビル、グリーンビル、ウィルミントン、ガストニア、グリーンズボロ、シャーロット、ラレイ、チャペルヒルの9カ所が各TEACCHセンターの所在地です（2001年2月現在）。そしてチャペルヒルにあるノースカロライナ大学の医学部に所属するTEACCH部が、TEACCHプログラム全体のコーディネートをしています。

《さまざまな協力と共同》

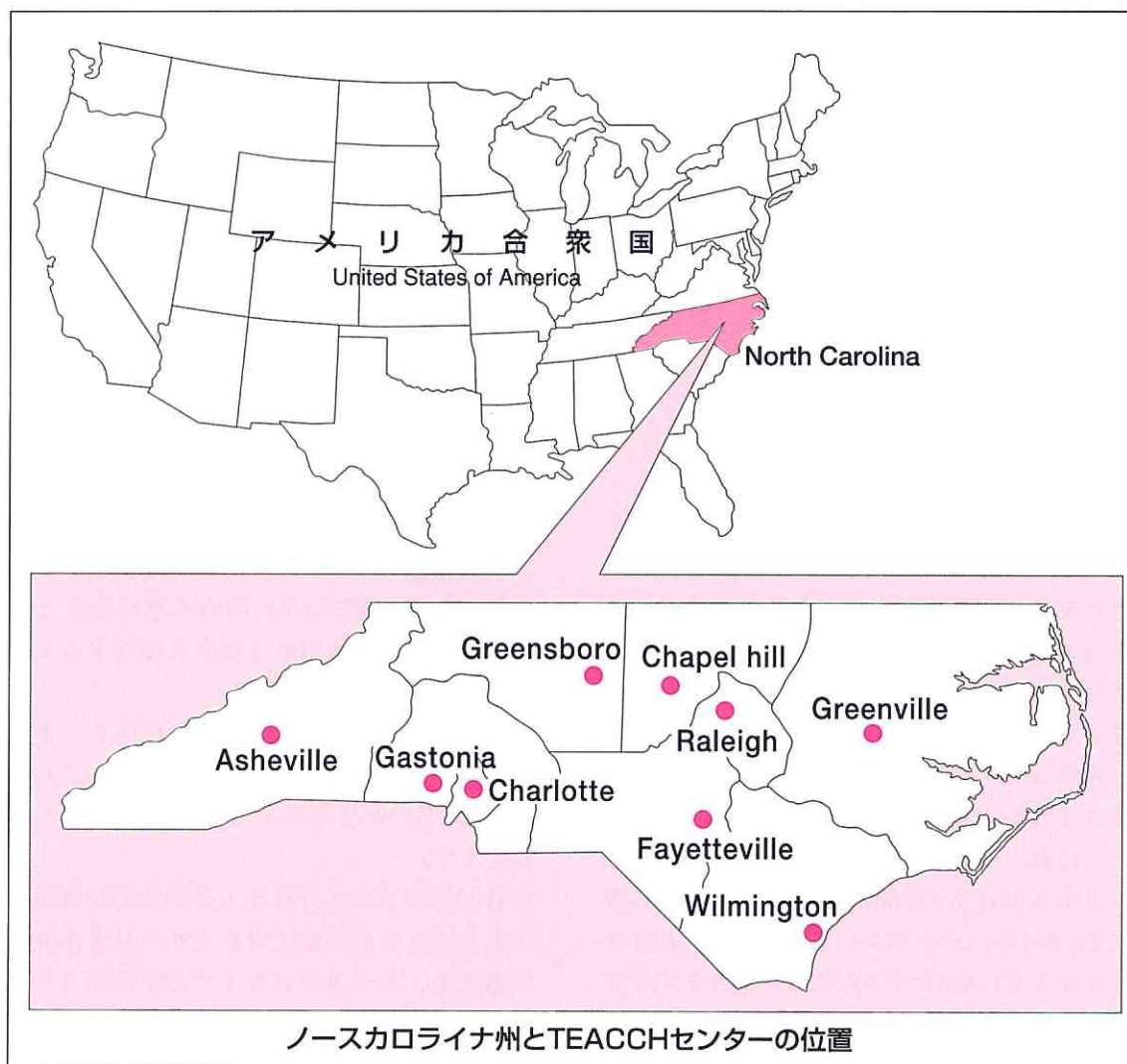
TEACCHプログラムを十分に理解するためには、まずTEACCH部の大きな特徴となっている3つの基本的な要素を理解する必要があります。

まず第1番目の要素は協力、共同し、手を携えてやっというものです。これはTEACCHの最も基本的な考え方、哲学とも言えます。

1963年にノースカロライナ州政府が自閉症の人たちとその家族に対するサービスを展開するため、ノースカロライナ大学に協力を要請してきました。すでにその時点で州政府は、自閉症が非常に複雑な障害で、しかもその障害が多岐にわたっているために、1つの組織だけですべてをまかなうことはできないであろうという認識を持っていました。

自閉症の人といっても、ある特定の年齢だけに見られる障害ではありません。13カ月ですでに自閉症と診断されている子どももいれば、70歳、75歳といった人もいます。また、自閉症の人たちの機能レベルも多岐にわたっています。なかにはIQが10以下の人もいれば、一方で150を超える人もいます。

TEACCHプログラムを始めた当初から、自閉症の人たちとその家族に対して援助を行う人は、自分1人でそのサービスを展開できるものではなくて、必ず他のさまざまな分野の人々と協力、共同しながら取り組むことが



必要であると私たちは伝えてきました。

ですからノースカロライナ大学で私たちが指導している学生の専攻分野も多岐にわたっています。TEACCHプログラムの指導を受けている学生は、例えば心理を専攻する者もいれば、医学、教育、ソーシャルワーク、ST（作業療法士）、OT（言語療法士）、リハビリテーション、レクリエーションなど、15もの専攻分野にわたります。

また、州の諸機関の中にも特定の年齢だけを対象にしている機関、特定の分野だけのサービスを提供している機関があります。しかし場合によってはそれらの壁を乗り越えながらやっていかなければなりません。このよう

にサービスを展開する際には、あらゆる分野にわたって協力と共同が必要だということが私たちの考え方です。

なかでもまず最初に挙げる協力と共同が大学と州政府の間との関係です。アメリカの場合には、大学は主として研究・教育機関で、実際にサービスを展開し、プログラムを開発し、日々家族を支援していくのは州政府の責任であるといった分担がなされるのが一般的です。

ところがTEACCHプログラムの本部であるノースカロライナ大学は、教育や研究だけではなく、州全体にわたる臨床プログラムにも責任を持っています。つまり、私たちが大

学で行っている研究は、実際に展開されているサービスから孤立した形の研究ではなく、TEACCHプログラムの一部としての研究が行われているのです。要するにサービスを反映して研究が行われ、同時に臨床プログラムの中でその研究の成果を確認したり、またそれをさらに良いものへと洗練させていくというもののなのです。このように、研究とサービスを連携させて行うためには、大学と州政府、そして地域社会との積極的な協力関係は不可欠な要素なのです。

もう1つの協力と共同は、親と専門職のパートナーシップです。親と専門職がチームを組むということは非常に重要で、そのチームの中で協力、共同していかなければなりません。TEACCHプログラムが始まった当初の5年あまりの経験をまとめた論文の中で、TEACCHプログラムの創始者であるエリック・ショプラー博士は「親はコセラピスト(共同治療者)である」という言葉を使っています。これは親と専門職の間に境界はない、線引きはしないということです。私たちは親と専門職が真のパートナーとして協力的に仕事を進めることで、初めて自閉症を取り巻く非常に困難な状況を少しでも良いものに変えていくことができると考えています。

また、こういったさまざまなプログラムやサービスは、子どもを対象としたプログラムと成人を対象としたプログラムが全く別のものとして存在していることが多いのです。しかし私たちのTEACCHプログラムでは、子どものプログラムも成人のプログラムも1つに統合して展開しています。私たちのプログラムに2歳あるいは2歳半で最初に子どもがやってきて、自閉症だと診断され、サービスを受け始めるその瞬間から成人した後も、意味のある、そして楽しい、満足のいく生活を送るのに必要な能力を開発するためにプログラムを展開していくのです。

以上のようにTEACCHプログラムの重要な要素はさまざまな協力、共同関係です。個人、スタッフ、家族とセラピスト、そして諸制度の間でも協力、共同関係を組みます。大学と州政府、政府の機関も複数の機関にわたり、子どものプログラムと成人のプログラムなどと、あらゆるレベルにおいて協力、共同関係を持ってサービスを展開することによって、プログラムの効果は最大限になると私たちは考えています。

《包括的サービスの提供》

協力、共同の精神に次いでTEACCHプログラムの2番目に重要な要素は、あらゆる機能、年齢のレベルの自閉症の人たちに対して総合的で包括的、かつ統合されたサービスを提供しようというものです。

自閉症の障害や療育に関する多くの理論家や学者、療育者たちは、実際の自閉症の臨床プログラムから切り離されたところで理論展開をしている人たちがたくさんいます。つまりこういった人たちは実際の生活や学習などの現場につながりのないまま、自分たちの理論や哲学が有効であるということを訴えているのです。またこういった人たちの中には、TEACCHは嫌いだと言う人たちもいるし、自分たちのアイデアこそが正しいのだと言っている人たちもいます。しかし私たちがこの人たちと違うのは、私たちはノースカロライナ州全体の自閉症の人たちと家族に対して包括的なサービスプログラムを日々提供し、その中で実証と検証を積み重ね、さらに実践しているところにあります。

毎年、ノースカロライナ州の各地域のTEACCHセンターで700人あまりの子どもたちが自閉症と診断されています。その診断・評価の場面ですでに子どもに対して、例えば左から右*1への自立スキルを同時に教え、またその親に対しては療育指導プログラムの

*1「左から右」 課題(作業)を行うときの手順などを、すべて「左から右」への流れで統一すること。いつも決まった流れ、手順で行うことで、子どもたちに理解しやすくし、安心感を与える。(詳細P22)

中で同様のスキルの指導を開始しています。

ノースカロライナ州全体で、毎年2,000人あまりの子どもたちが学校でTEACCHプログラムの原理・原則を使いながら教育を受けています。養護学校、障害児学級、またリソースルーム（通級学級）で指導を受けている子どももいれば、普通学級で教育を受けている子どもたちもいます。それぞれの子どもたちのニーズによって、それぞれに適した場面を選んで指導していくのですけれども、そこには1つの共通項があります。それはTEACCH部が開発した『構造化された指導法』というテクニックを基本にして、その療育プログラムを組み、実践しているということです。

さまざまな年齢の子どもたちは学校教育だけでなく、ソーシャルスキル（対人的技能）のトレーニングも受けています。小学生もいれば中学生や高校生もいます。毎年、多くの子どもたちがノースカロライナ州でTEACCH部が開発した考え方にのっとりソーシャルスキルの教育的サービスを受けています。

また、自閉症の子どもたちも地域社会の住民の1人として、さまざまな地域の活動に出かけていきます。野球を見に行く、レストランで食事をする、またダウンタウンを散歩する、そして映画を見るなど、地域で行われているさまざまなレクリエーション活動にも彼らは参加します。

レクリエーション活動もTEACCHプログラムの中で非常に重要な部分をしめています。そして、そういったレクリエーション活動も私たちはTEACCHの構造化された指導法をベースにして計画します。

ここで強調したいのは、この構造化された指導法というのは単に教育、療育のアプローチであるだけではないということです。また、自閉症の人たちが将来、就労の場で自立して仕事ができるようになるためだけに構造化された指導法があるのでもなく、もっと幅広い意味を持っています。

構造化された指導法は、自閉症の子どもた

ちに対して環境の持つ意味をはっきりと理解させるということが1つの重要なポイントです。そして自分のいる環境がどういったものであるかを理解することによって、彼らの自己決定や自己表現のチャンスはより豊富になります。いまの環境の中で何を、どのような活動を選べるのか、そしてどうやればそれが達成できるのかということを彼らが分かれば、自己決定が行われる機会も多くなり、内容も豊かになります。実は構造化された指導のゴールはそこにこそあるのです。

このように構造化された指導法を導入することによって、自閉症の人たちはさまざまな社会活動に参加することができ、地域の人たちと触れ合い、地域の生活を楽しむことができ、彼らの生活そのものが充実した豊かなものへと変貌していきます。

成人になってからの地域での生活も、もちろんTEACCHの考え方を基本としています。グループホームだけではなくアパートや戸建ての住宅など、さまざまな居住の場で構造化のシステムが導入されています。もちろん職業的場面でも自閉症の人たちが地域に密着して生産的、効果的、そして自立的な就労を行っています。

このように協力、共同の精神にのっとり、私たちは包括的で一貫したサービスを自閉症の人たちに提供しています。

《構造化された指導法》

TEACCHプログラムの3番目の重要な要素は、2番目の要素の中でも少し触れたTEACCH部が使っているテクニック、『構造化された指導法』です。これは私たちの40年あまりの取り組みの中で、実践を通じ、慎重に見直し、また改良を加えながら育んできたテクニックです。

TEACCHの構造化された指導法の基本となるのは実は自閉症についての十分な理解なのです。自閉症の人たちがいかに思考し、学習し、そして情報処理をしているのか、これを

理解しなければ療育的指導はあり得ません。

私たちは、自閉症という障害が器質障害であるということを知っています。すなわち自閉症であるということは脳の機能や構造が自閉症でない人と違っていているということです。TEACCHにおける構造化された指導法とは、まず自閉症の脳の機能の違いを理解し、そしてさまざまな情報の組織化の違い、思考の仕方や学習スキルの違いを理解し、その上でそういった違いを持つ自閉症の人たちにもできるだけ理解しやすい教育や療育の方策、アプローチの方法を検討していこうということなのです。

これを理解するために、私は自閉症の文化という言葉を使って説明しています。ここで私が言う文化とは、同じような思考をし、同じような価値観を持つ人たちのグループが持つ共通の世界観を指しています。

このように文化ということで考えるならば、自分の文化と違うからといってどちらが良い、どちらが悪いということではないということに気づかれると思います。ただし他の文化に属する人たちと付き合っていくためには、その違いを理解しないといけないし、またその違いというものに私たちは敏感でなければなりません。同時に、その人たち——自分たちとは違った文化を持つ人たち——とどのようにコミュニケーションをすれば良いのか、いかに尊重し、協力していけば良いのかを考えなければなりません。

私たちのアメリカという国は多様な文化のつぼ、人種のつぼと言われているように、たくさんの文化が存在し、共存しています。このようなたくさんの文化が共存する国では、それぞれの文化に属する人たちが自分たちの責任において他の文化も理解をし、共感をし、そして尊重していかなければいけないのです。

同じことが自閉症の文化についても言えます。自閉症の人たちは私たちと違った脳の機能を持っています。ですから思考や学習のパ

ターンも、理解も、また情報の組織化も私たちとは違っていますが、別にどちらが良い、悪いということはありません。ただ、彼らが違った文化を持っているということを私たちが理解していないために、彼らの文化を尊重せず、彼らの分かる形で療育、教育のプログラムを私たちの方が組んでいないというところに、自閉症の人たちの抱える問題が存在するのです。

自閉症の脳の働きについての理解が深まり、彼らがどのように学習するのかということの理解が深まるにつれて、構造化された指導法そのものも当然進化をしていかなければなりません。自閉症の人たちの文化をより理解することによって、私たちはさらにより良い援助の方策を開発し、彼らにとって意味のある、そして満足のいく生活を送れるような療育プログラムを組んでいく必要があります。

自閉症という概念を別の方法で理解するために冰山を例にとりて考えます。

氷山の問題は『氷山の一角』という言葉があるように、水面より上に出て目に見える部分の方が小さく、しかも重要性が低い可能性があるというところなのです。実際には水面の下に隠されている部分の方がずっと大きく、重要で、大きな意味を持っている可能性があります。しかし残念ながら、私たちにはこれが見えていないのです。

自閉症についても同じことが言えます。水面より上に出ている部分、すなわち私たちの目に映ってくるものは、彼らのフラストレー

